

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5 月 18 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520165

研究課題名（和文） ヴェルディ・オペラの総合研究の一環としての「イタリア」と「ドイツ」の関係性の考察

研究課題名（英文） An Examination of the “Italo-German” relationship as Part of a Synthetic Account of Verdi’s Operas

研究代表者

丸本 隆（MARUMOTO TAKASHI）

早稲田大学・法学学術院・教授

研究者番号：60030186

研究成果の概要（和文）：

オペラ研究はまだ歴史が浅いものの、近年、諸外国での発展ぶりは目覚ましい。一方、日本では依然としてこの分野での立ち遅れが目立ち、オペラの代表格ともいえるヴェルディの場合ですら、学術レベルにおいて、その重要性にふさわしい取り組みがなされているとは言い難い状況にある。本研究者はそうした現状の中で、日本のヴェルディ研究の飛躍に貢献しうる可能性を意識しつつ、これまで行ってきたドイツ文学・演劇学研究の実績を踏まえた「ドイツとの関係性」というテーマを手がかりとする、ヴェルディ・オペラへの本格的な学術的アプローチを試みた。その成果は、研究期間中に発表した論文にも一定程度反映されているが、今後早い時期に、本研究課題に直結するまとまった論考を完成すべく、現在執筆を進めている。

研究成果の概要（英文）：

Opera studies, which have a relatively short history, have recently achieved, particularly in some advanced countries, remarkable development. In Japan, however, opera is still so little studied that even Verdi, one of the most representative opera composers, hasn't become the object of academic interest yet. In order to correct this situation, the present researcher attempted a full-scale approach to the operatic works of Verdi from the perspective of the 'Italo-German relationship' based on the knowledge of German literature and theatre studies he has acquired thus far. The results of this approach are reflected to a certain extent in some papers published during this research period. Furthermore the completion of a comprehensive account of the present subject is now making great progress.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：演劇学、オペラ論

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：ヴェルディ、オペラ、イタリア・オペラ、シラー、ドイツ演劇、独・伊比較文化、異文化理解・受容

1. 研究開始当初の背景

オペラは舞台芸術の一形態としてヨーロッ

パ文化の重要かつ不可欠な構成要素をなすが、それを対象とする学術研究の歴史はまだ新しく、オペラ文化を中心的に担ってきた欧米諸国でも、その研究が本格化するのには、ここ三、四十年のことである。ましてや日本では、近年オペラ文化が徐々に根付き始めてはいるものの、アカデミズムの世界では、依然としてオペラへの関心は低レベルにとどまっている。そもそも舞台芸術は全般的に、従来の伝統的なテキスト重視の学問的枠組みに組み込まれにくかったが、その1ジャンルであるオペラが学術研究の対象とされるようになるのは、演劇よりもさらに遅かった。その背景として、オペラが、「音楽」が極めて大きな役割を担う、より総合性の高い「演劇＝舞台芸術」であるため、一層広域的な学際的アプローチが要求されるという、この分野特有の困難さが指摘できる。また日本など非ヨーロッパ文化圏の研究者にとっては、実際のオペラ上演との接点の確保や、国際性の強いこのメディアに対する研究に不可欠ないくつかの外国語（英・独・仏・伊語等）の読解のために、はるかに大きな努力を要求されるといった、ハードルの高さがある。だが近年、欧米諸国（特に英・独・伊語圏）においてオペラ研究が目覚ましく発展している現状を鑑みれば、日本でもその国際的な潮流に乗り、先行研究の成果を吸収しつつ、独自の「オペラ学」の確立を目指す必要性は高いと思われる。さらに日本でのオペラ研究をめぐる問題点として、オペラの誕生以来、とりわけそのメイン・ストリームであり続けてきたイタリア・オペラについて、その重要性にふさわしい学術的な取り組みがなされてこなかったことが指摘できる。そのイタリア・オペラの代表的な存在であるロッシーニ、ヴェルディ、プッチーニですら、学術的な研究対象として学会誌などに登場することは稀である。その要因として、

はるかに高い関心を呼んできたドイツ・オペラ、あるいはドイツ文化全般との比較でも明らかのように、明治以来の文化受容のあり方に起因する、イタリア研究（者）の層の薄さが関係しているように思われる。

本研究者はこれまで、主にドイツ演劇の研究に携わってきたが、その過程で次第にオペラへの関心を強め、特に2002年に開始された早稲田大学演劇博物館の二つのCOE事業に参加して、オペラ／音楽劇プロジェクトの共同研究を推進してきた。そうしたオペラとの関わりを通じて、日本のオペラ研究の発展のため、一研究者としていささかなりとも貢献すべき必要性を痛感するに至り、その一つの帰結として、存在の重要性ゆえその突破口となる可能性を大きく秘めた、そして本研究期間の開始以前から作品分析を試みるなど（「ヴェルディの《マクベス》—シェイクスピア劇をめぐる“前衛的”実験」、2008年、『オペラ学の地平』所収）、大きな関心をもって研究を進めてきたヴェルディのオペラのさらなる本格的な研究を目指して、本研究課題による科学研究費補助の申請を行ったものである。

2. 研究の目的

本研究は上記のような現状を踏まえ、イタリア・オペラを代表するにとどまらず、メジャーなオペラ作曲家の一人のとしてとりわけ重要性が高い、だが日本ではこれまで、それに見合った学術研究がなされてこなかったジュゼッペ・ヴェルディを取り上げることにより、日本のオペラ研究およびヴェルディ研究に一石を投じ、その進展に寄与しようとしたものであり、そのため諸国の先進的な研究を吸収しながら、影響力のある成果を生み出していくことを目指した。またそうした目的をより確実に達成するために、「ドイツ」と「イタリア」の関係性という具体的な課題を設定して、ヴェルディ・オペラ再考の試みに立ち

入ろうとした。オペラ研究は音楽学・演劇学・文学・歴史・文化史等々に及ぶ高い学際的・総合的アプローチが求められるが、これまで「ドイツ」「演劇」「文学」を中心的に専攻してきた本研究者にとって、さらに研究の幅を広げつつその要請に対応していくためにも、そうした基盤の上に立ち、この課題を手掛かりに研究を進めていくことが、より確実に成果を生み出しうると思われたからである。

3. 研究の方法

- (1) まず先行研究の受容の前提として、海外出張による現地の図書館等での作業を含め、特にこの分野で先端的な研究が遂行されている英・米・独・伊の文献資料、さらには作品分析のために欠かせない、実際の舞台上演を記録した映像資料の収集を精力的に行った。それらの資料に関しては、解説・分析作業に集中的に取り組み、ヴェルディのオペラ作品とそれらに通底するいくつかの問題点に関し、各国の先行研究の最新成果を踏まえた、ヴェルディ・オペラへの多面的なアプローチを可能にする、系統的なデータベースの構築を大きく進めてきた。
- (2) 本課題に関する知見を深めるため、先述のように、COE事業の一環として組織された「オペラ／音楽劇の総合研究プロジェクト」に参加してオペラに関心の深い研究者たちとの意見交換の機会を頻繁にもち、あるいは海外の専門家（特にアメリカ・イェール大学のクロイツァー教授、ドイツ・ベルリン自由大学のリージー教授）等との研究交流を行った。
- (3) ヴェルディのオペラ作品のリブレットはイタリア語（一部の作品はフランス語）で書かれている。また先行研究を吸収するためには最低限、英語・ドイツ語・イタリア語の読解能力が欠かせない。その

ため、これまで特に研究に使用してこなかったイタリア語の集中的な学習が、音楽学の知識を高めることと並び、課題遂行のための重要な目標となった。

4. 研究成果

イタリア・オペラの伝統を継承しつつ新たな地平を切り開いていったヴェルディのオペラ創造の実態を総合的に考察するためには、「ドイツとの関係性」へのアプローチが一つの重要・不可欠なカギとなるという点を前提に本研究を進めてきたが、その過程でそうした想定の妥当性を確認しつつ、論点を以下の3点に集約し、それぞれについて具体的な考察を通じ、一定の結論を得ることができた。[1] ヴェルディ・オペラの4作が、ドイツの代表的な劇作家であるシラー劇をもとに作られているが、それらのオペラと原作の間にはそれぞれ微妙な距離や影響関係の差が認められる。それらのオペラ自体や、さらにシェイクスピア劇を素材とする3作の原作との関係性の比較検討によって、ヴェルディ・オペラの本質理解を深化させる。[2] ヴェルディとドイツ音楽の関係性に注目し、特にヴェルディのオペラ革新の転換点となる14作目の《ルイーザ・ミラー》に焦点を定め、ドイツの管弦楽曲の影響のあり方を探る。また同時代の音楽界を圧倒的に支配したヴァーグナーとの関係性について、先行研究における影響関係をめぐる指摘を再検証するとともに、両作曲家の作風の比較を通じて、ヴェルディ・オペラの実態解明をさらに進める。[3] ドイツはヴェルディの存命中、ドイツ音楽の優位を背景に、ヴェルディ・オペラを芸術的に劣等とみなす傾向が強かったが、20世紀に入ると一転して、「ヴェルディ・ルネサンス」と呼ばれる「忘れられたオペラ」の「発掘」を通じて、今日に連なるヴェルディ再評価の先導役を務めるようになる。そして以後、ある意味で、イタ

リア、フランス以上に、ヴェルディ受容における重要な役割を果たすようになっている。本研究課題では、そうしたドイツの実態に照らしつつ、従来とは異なる視点でヴェルディ・オペラを再考査し、その特徴や現代に通じるアクチュアリティ等により深く迫っていく。

以上の研究によって得られた成果は、本研究期間中に執筆した論考にも一定程度反映されているが、さらには今後早い段階で、研究課題全般により直結する成果物を、著書・論文等の形で発表していきたいと思っている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① Marumoto, Takashi. *From Chink Okichi to the Judith of Shimoda: Brechts Incomplete Attempt to Adapt a Drama by Yuzo Yamamoto* (2). 査読なし、Theatre and Film Studies 2011/International Institute for Education and Research in Theatre and Film Arts, Global COE Programme, Theatre Musium, Waseda University 6, 149-158.
- ② Marumoto, Takashi. *From Chink Okichi to the Judith of Shimoda: Brechts Incomplete Attempt to Adapt a Drama by Yuzo Yamamoto* (1). 査読なし、Theatre and Film Studies 2010/International Institute for Education and Research in Theatre and Film Arts, Global COE Programme, Theatre Musium, Waseda University 5, 71-98.

[図書] (計 4 件)

- ① Marumoto, Takashi. "A Song for Kingdoms: Takarazuka's Attempt to Adapt the Opera Aida." *A Kaleidoscope of Japanese Theater. Essays in Honor of Stanca Scholz-Cionca*. Eds. Grossmann, Eike et al., Munich:

Iudicium, 2012. (掲載確定)

- ② Takashi Marumoto, "Comedy and Laughter on the Japanese and German Stage." *Japanese Theatre Transcultural. German and Italian Intertwinings*. Eds. Stanca Scholz-Cionca and Andreas Regelsberger Munich: Iudicium, 2011, 51-68.
- ③ 伊藤裕夫・松井憲太郎・小林真理 (編)、丸本隆他 13 名 (著)、『公共劇場の 10 年』、美学出版、2010 年 11 月、分担箇所: 「劇場監督」制度からみたドイツの公共劇場、159-178 頁。
- ④ 谷川道子・秋葉裕一 (編)、丸本隆他 9 名 (著)、『演劇インタラクティブ 日本×ドイツ』、早稲田大学出版部、2010 年 3 月、分担箇所: ドイツの日本演劇受容にみる異文化「誤解」のダイナミズム—「能まがい」「歌舞伎もどき」が投じた波紋—、89-113 頁。

[その他]

- ① 丸本隆 「平田栄一朗著 『ドラマトゥルク 舞台芸術を進化/深化させる者』」(書評)、週刊読書人/(株)読書人、2875 号、2011 年 2 月、6 頁。
- ② 丸本隆 「オペラ《ブローチェク氏の旅行》の世界—「九人」の台本作者とヤナーチェクの音楽」、「Symphony」/東京交響楽団、2009 年 12 月、13-15 頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

丸本 隆 (MARUMOTO TAKASHI)
早稲田大学・法学学術院・教授
研究者番号: 60030186